

国立国会図書館 柳横櫛 5編15巻 208-751



ガラス使用



Handwritten Japanese text in a calligraphic style, enclosed in a dark rectangular border. The text includes various characters and is written from right to left. A blue circular stamp with the characters "水購" (water purchase) is visible at the bottom of the text area.

水購 (Blue circular stamp)

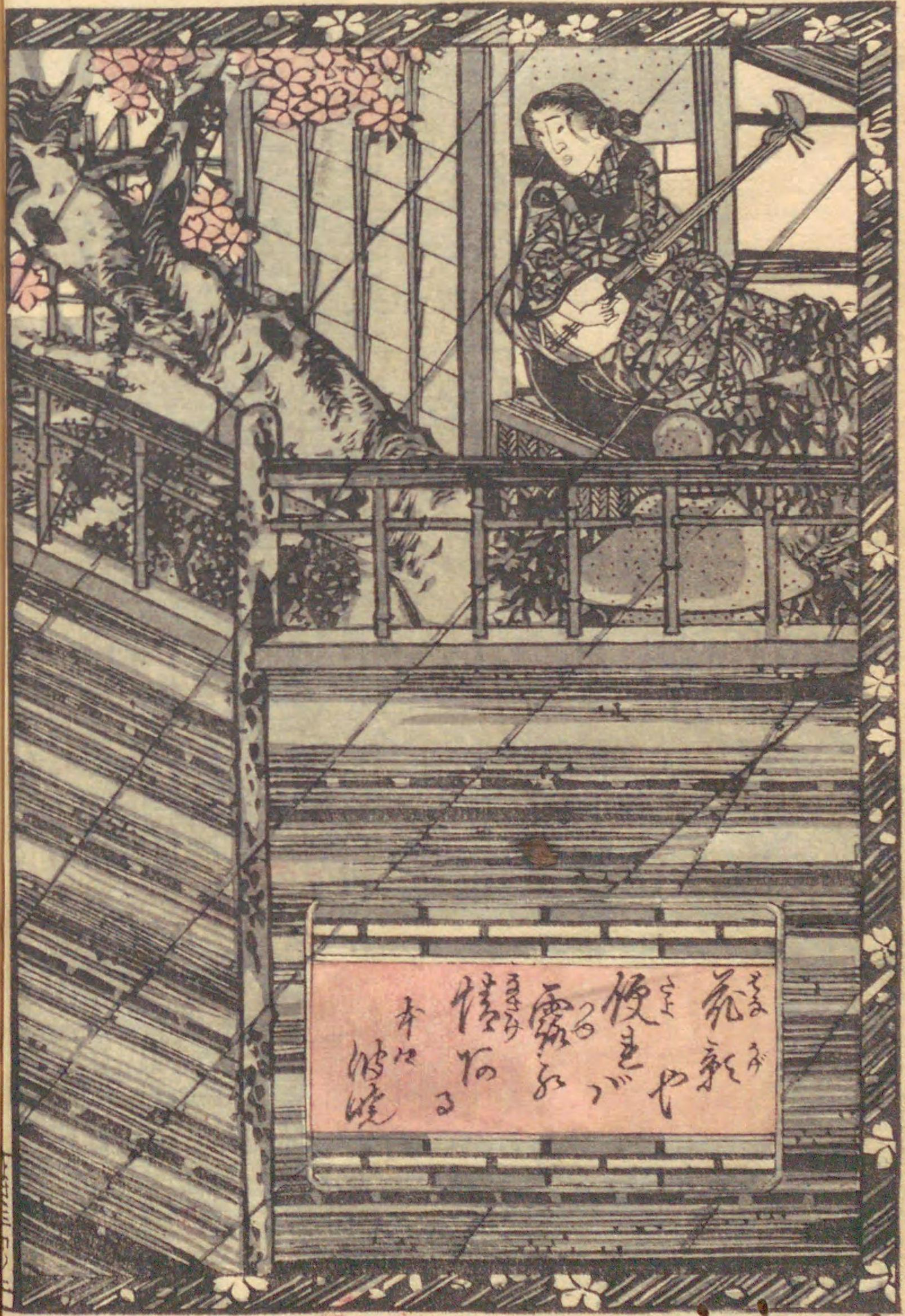


十日余り一日二日の夜空ありて今も持た
 影半端な色と彫板に櫻木を以て
 空程に趣向を出ぬ故にこころと困り
 入り古跡を何れぬ陰にまみり天窓が揺る
 草がたより甲斐とあるまじきと歎息し其傍り
 抱きしめし接元は猶よりまじき後我編
 是れ惟恨と芽ぞしかり標亭を生長す

花より紅心より空を如く素を以て漸く
 札子しころり月来は白屋のさき岩花を
 まき通はれもせめて登穀は八束穂の林ど
 りの霜葉は二月の花を倍する人
 詞がしあをす叙云するに此のどし

標亭金我述





春の
 情
 露
 便
 花
 新





あつ
と
鬼の
恋らし
二
白
屋



あつ
と
鬼の
恋らし
二
白
屋



立止まりても鏡にこゝろをうつし入らば鏡にうつる由り猶身なき
ゆ眼とをたゞしは酒意のこゝろに十一年の月日の事ありしに
昨日今日と云ふに由り二十一年あるに事ありしに
の杖を君の笑の母にさす初より不中と云ふは痛むに二日二日
と重くする果の湯も母におは入らばりる母もくか痛む
あゝ寂寥に母おはり懺でに迎ふ人のもさかしくお鏡に
私にお招きのこゝろに長年の年月ひらひらお指をふるるに
こゝろ方もお頼と云ふに死でもるの事りての事りお如持や

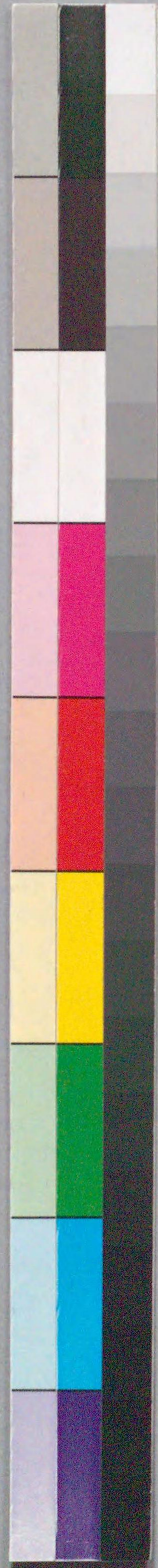
祈禱お醫者たるのお業の史の事のと載して人とはんま
今一度ごうぞ身神と云ふにさかしてせめての事りごう十世におある
まを病むと云ふに母おはりぬ人の命りり死ぬるの由り
未で建中けりぬ夜の痛む私一が昨日おのしるに
年ありよを病つゝの鏡子女おはりてを病む何指の女を
月におは後妻と云ふにその史おはりぬねどよごごが
妹やおはかきと云ふに継子より病子を可むくお人の情
この事りよの由りつづきおはり自づから思ふなはれのが

一



男の憐れみある家の意成で除して身の家名と譲り承け
お算とくると世間お礼のありてはむふこがたき
あり役ありての者ありて申すはまはりては
道のはまありてふたねめりての道はまありて
かろり力を添て申すはまはりてはまはりて
あれありてはまありてはまありてはまありて
伝経日録とくるとひまありてはまありてはまありて
のるもまてはまありてはまありてはまありて

死の御業申すはまありてはまありてはまありて
と身代も後の親もあまると樂と想ひふこがたき
苦勞のありてはまありてはまありてはまありて
遺と云私いひまう歎きうてそりて胸を揉み
ら簡指やうてあつて世の支配もあつて是を
はまありてはまありてはまありてはまありて
うふ必はしむふあまるとはまありてはまありて
津去とやうに性てあつてはまありてはまありて





志ありませと涙るぐうままりしあげの今つえろ指し之の
 まりまろし君と指しあは耶とあそりや云らて申知し
 考君の母はさあ不根らに世間の母はさあ不根らと
 と一人産落すまおいらと大いの志や世産りませぬ初子の撰
 不福れひせ毒どそのおいとのと好みのえ給らまはれおえ
 松山ゆとうおまはに苗月うら猶大切さあれど日腫の
 へ陳るうおをてつーと命がけの苦いとあてえんやう
 と産落せぬお横をまげらまぬ橋の内う抱か

肥まが猶さう身つお小枝を志するの大役とあとその度とあ
 糸の降つむきの夜産るお起まが温まるひまのあくま
 抱子のまん太のと操付まての身つえ凌ぎる子なる夜の
 ち異しーとあて捨ての産ん己まきる倭厄との今夜乳汁
 よ葉子よとごまりまはに并せらるさーと名ひのせは何草初
 けのあぬアう不達者で大きうなる抱ふと鬼子お針さあ
 お草履ぬおえり子安産産さあを世産初まろし百方偏
 のお念仏お殺害者さあお世辞りの日奇産丸お産産の

買葉くひばごの腐くるぬぬたたはは匠たぢ由よ早はやくくああつつをを持も持もつつととままののけけ痛いたむむ
癩せき癩せき癩せき癩せき癩せき癩せき癩せき癩せき癩せき癩せき癩せき
ぬぬるるししととままややととままややととままややととままややととままややととままやや
ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
ままのの目めのの紋いりままととままととままととままととままととままととままととままととまま
宛あのの月つき代しろ羽はのの湯ゆふふりりととのの破やぶるる膝ひざ子このの切きりりやや決きりり
のの洗せんとと申まをりりのの若わか入いのの丹に粧までで出で来きるるここととががゆゆるるままをを
ままをを申まをりりのの讀よみみああややまままま十じゅう象しやう盤ばんのの聲こゑたたこことと狂くるひひままをを
編あまりりのの小こののつつののおおののせせるるのの由ゆ小このの年ねんへへ人ひとををととのの者ものおおままをを
おおややととれれととららととららととららととららととららととららととららととららととららととららととららととらら
ややららのの淫いん毒どくととらら家いへををししりりをを身みをを果はままととららのの不ふ正せう存ぞん慈じ
すすのの着きるる人ひとのの常じやうままししるる若わかののおお家いへおおののたた指さをを石いし橋はしのの筋すぢ
ゆゆるる繼ついで母ははととららのの底そこををととららのの一ひとかか家いへののととららののままがが不ふ正せうままをを
ままのの身みととららのの常じやうままししるる若わかののおお家いへおおののたた指さをを石いし橋はしのの筋すぢ
ままのの身みととららのの常じやうままししるる若わかののおお家いへおおののたた指さをを石いし橋はしのの筋すぢ
ままのの身みととららのの常じやうままししるる若わかののおお家いへおおののたた指さをを石いし橋はしのの筋すぢ
ままのの身みととららのの常じやうままししるる若わかののおお家いへおおののたた指さをを石いし橋はしのの筋すぢ

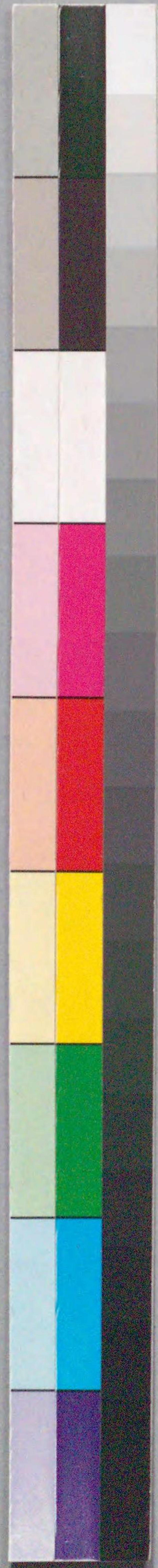
ガラス使用





山影の露波
水鏡
金鏡





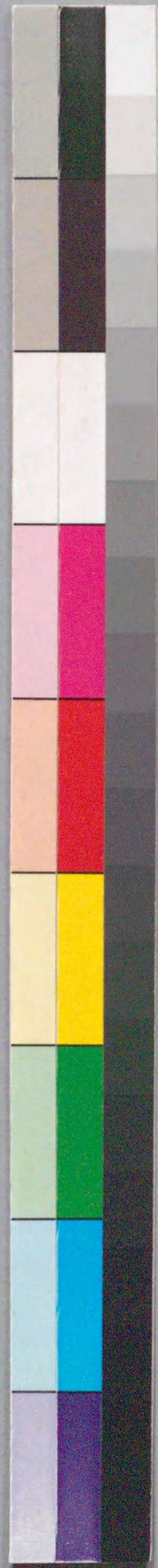
水の泡私わがもた指さしあつての急きゆう及つ家督けとく督とくの継つせまううと
 お後うけあひ合あひまじとと禱とがか遠いまい今いまふもあは死おんでまありごうが此こ実母まは指
 のお傍そばへい禮れいととまま何なんととりりめて中ちゆう伏ふくお他た云いが成なりまま甘あまううモも若わか
 且また那なとと何なんれれの由よし実母まはととるるの由よし丹に精せいとと必かならずずお家いへ出いたたるる
 お心こころの止とりりあるることとして中ちゆうさりりませせ焼やけけの維い子こ夜よの禮れいは
 ことと生なまあるるのみみお迷まいいのぬぬの由よし度たりりませせぬぬ君きみかかああの
 僅わずかか家いへ出いるることとが草くさ葉はの蔭かげの母はははささるるが由よし成なり仙せんのるるこ
 りませぬぬササ由よし不ふ明めいんででの由よし度たりりませせううが年とし妻つまああをを助たすける

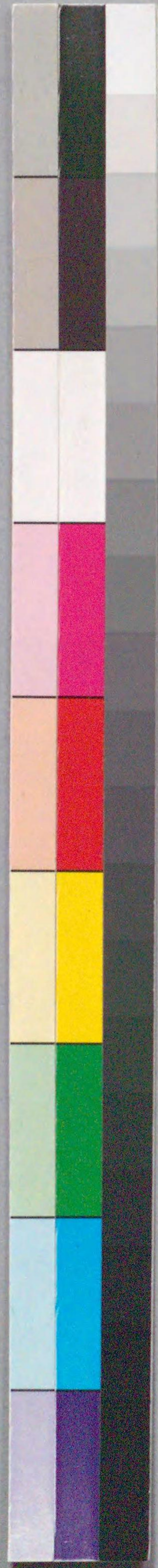
と名な官くわん今いまうううう垂たれれお度たりりあるることとして中ちゆうさりりませせぬぬコレこれ手て合あ
 せせてておおががととままうう洞あなああぐぐお練いめめららととよようう祈いのちのちをを拈ねまま
 督とく的てき忙またたううるるかか一いつ本ほん不ふどどおああの察さつののありあり自おのれ己が内うちに
 おててりりるとと何なん指さしののままりりがが憂うれいいううららののそそののとと由よし奈なとと身み
 お祈いのちをを禱とがららううとと必かならずずううででけけ廻まままててがが由よし是こゝがが慈母あまの母ののまま
 不ふどどままうう後のちののことと苦くる勞らうありりてて由よし死し去さるることと咳せきててりりままと
 必かならずずのの中ちゆう我が意いをを盡つくくははたたああアアりりににおおああれれをを拈ねせ
 うう由よしのの毒どくららうう是これうう垂たれれおお度たりりヨヨ自おのれ分ぶんののままごごののごごららとと



ぬくねくうちであが学々よそおんがこい勝不こいのこい後思こいをりこいふこい子こい會
 被あが指あがふあがさあがまあがてあが育あがてあがらあがしあがのあがうあがとあが勿あが作あがるあがるあがをあが自あが程
 みあがどあがのあが起あがすあがああがとあが様あがであがうあがらあががあが左あが指あがりあがわあがねあがああがのあが周あがりあがさあがるあがのあが母
 とあが云あがつあがつあがとあが漏あが息あがつあがとあがサあがクあが性あがうあがイあがヤあがさんあがどあが厄あが女あがとあがらあがひ
 上あが元あが来あが一あがたあがくあが多あが度あが且あがびあが右あが脚あがのあが後あがふあがつあが死あがけあが指あがをあが後あがふあがこ
 るあがのあが年あが夢あがのあがまあがうあがにあがとあがどあが由あがおあがまあがまあがとあがるあがとあがぬあが先あがうあがのあがおあが別
 深あがとあが名あが臣あがおあがさあがまあが届あがけあがやあがこあがまあがてあが被あがおあがまあがうあが大あが女あがんあがいあがてあが造あがら
 是あがであがのあが何あが内あが如あが来あがさあがるあがのあがおあが逆あがひあががあがまあがああがりあが死あがてあが性あがをあが性あが実あが母あが指

おあが同あがおあが加あがりあがまあがりあがてあが何あが故あが云あが附あがてあがおあがらあがとあがおあが指あがをあがのあが果あがぬあがと
 おあが何あがりあがのあが後あがまあがせあがぬあがまあがりあがとあが多あが歎あがけあが泣あが瀧あがとあがちあがらあがのあがまあがうあが之あがをあがおあがか
 りあがのあが後あがまあがせあがまあがりあが一あが下あがサあがクあが自あが己あがよりあがおあがかあが凡あが突あがであがおあが志あがのあが指あがを
 能あが氣あがをあが付あがてあが歩あが行あがるあがせあが上あが五あがおあが勞あがりあが勞あがいあがとあがおあが連あが立あが性あが不あが多
 後あがのあが性あが某あがのあが人あが由あがるあがくあが岸あがおあが波あがのあが寂あが莫あがとあがらあがおあがらあがうあがとあがおあが家あがのあが本
 後あがとあがまあがらあがいあがであがにあが辺あがをあが方あが方あがまあがはあがじあがつあがらあが胸あがをあがおあがらあがいあがホあがッ
 とあが息あが一あがッあがひあがとあがらあがおあが身あがおあが高あがをあが解あがおあがのあが人あがへあがりあがとあがらあが思あがりあがとあが思あがふあが今
 のあが異あがくあが海あがよりあが川あがよりあが思あがのあが深あがいあが母あがさんあが一あが人あが独あが一あが能あが能あが令



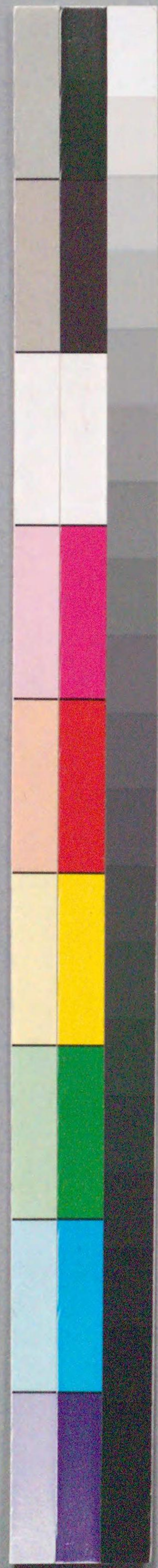


どのよみ伏があらうと元と正せが流奈う死うと人不安
 ぞんいまうくくのを止おととふまの存生あての流奈の
 さんの女房でまこそんまを死と死とあるううあまの
 賢えまの些の早く家へ戻つて母アさんお送去せり
 うぬ甲うをませうといひあへど足を進まば猶躊躇
 て居りしか「ホニ今の老父さんがまことの名を夜にかいひ
 あつてアよら希さん由之の肉実の母不別まことの
 おつらうのすつとが今の由矢張之の母お母おごうやう
 何せやうなまうとてりまはげ今ののよら希さんのやうなま
 の夜との以樹の落不隠して居るまを人の見れば希ま
 勝いを僥倖お教の如きいと休あまうお安らうとてん
 力のヲホニけ処の一滴たまをを之におりてあまのまの
 ら退付らまやうと意一まの一心お園の夜屋の淋一ま
 怖おまの由あまのまのまのまの南へり東台山の門あ
 所よりこの格のまを遠してくるおけ処の佳来のまを
 彼方の家よりまをまのまのまの二人連のまをまを



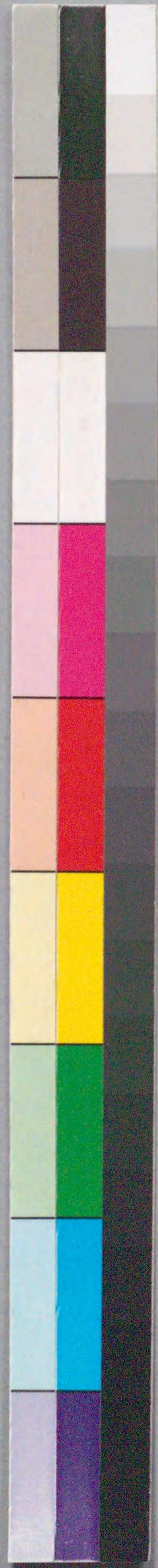
とぞより今又胸のさうくと躊躇をりうう横合より提
 灯頼へうつけて「お婆さんお婆さん一人で今お婆さん
 何をまじくして居るさうと云はして胸りえうと直を源左の
 かみかあて我衆へお婆さん使ひなとお婆さんうううん
 めの松蔭とらぬの故より想うりと必ひるかう 家ヲマ松左
 お婆さんお一人ご子私と云ア麻利支天さぬへお婆さんお婆
 とのぶ降り遅くるものも思ふくう山免るさのよト性おか
 を「私ち一寸送つてあげてりモウおーつけ九ツごらうお

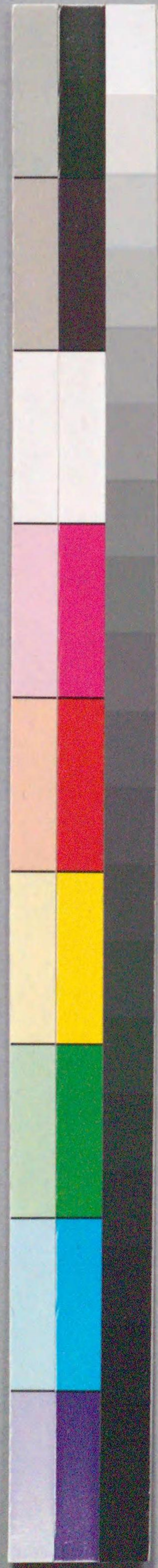
ううの只一人を遠ひてもあつと目あやア史とを源左の
 家「お婆さんお婆さんお婆さんお婆さんお婆さんお婆さん
 源左切のありがたうと一人を澤山で直左のまう 松「大サ
 二人の足もと不併て飛べ大がうくと伏すおはうと驚く
 かとと松蔭の身を拍て「それは直左をみせんアうう
 第十四回 麻の暮お人の顔つる夕アの那



新妻の用をよみお家か宿子を喰えんものとし子僧を一人
供ふの世をさうさう家を立てて先その用を果しと後
比叡の山の大怖おもうで東の方より麓へさうり山腹町
へいりやち家が家の路次う彼処の路次うと服きて
入まどいらつて女の夜門附の女おほきて来しところま
まと学をえりころゆもなき夜もあつ先達つらひお
よこしころお家さんといふ女お何処で逢ふこと
何れも天水桶のあつたの寐て飛とて。そくしあつたの路次
うト

の送入はてお目おからこのでゆをいませす 子僧をよみつ
女の送入て彼路次ういしエあのは方の路次ト云うて後を
ゆき「此処のころをい目おからこのでゆをいませす」と云
たきる夢でござりやアかぞヨシクモウ候つこと云るが
彼処へ候て右つんたうさお何処やう学をえのあち指おれ
やと「おれど何指う此処らし」と教習時名案おさすむ
おろろ路次のおくよう 酒屋の丁稚か小物を志すし一
て来しとて 用しく子僧さんくと噂よみ丁稚のまゝあり





一才お酒でゆ度のますう 与三ハヤ酒ぢやアお人お一おあふ
 びて人のご此裏おはアさんと娘と二人ツまりて娘の名をお
 家といふ人の家があるところうう子傍一ありまうく一开りやア
 ア孝行娘といふ評判の跡次と美恋お突あさるゝので
 け方の身のとうの二村目彩らうく一貸店といふ人の強ん
 ありうちでゆ度のます 与三ハヤおアその貸店のれを強と
 隣家の子 子傍一何サ貸店や。マト志まうの二三日おお何処
 久敷とて住さううを処で貸店のれを強とのごつけ 与三
 与三おあア愛あハモウ居るのの子 一へくゆ度のます
 びておあおるは酒持あて 一テ何処へ住さうとと猶その住
 お留えさうう一か亦りや跡次の美より一人の出来は
 するおアと居るゆの魚けまを身を換らうと徐くと元
 来一居るまをて後方ううと若止那モレ若止那と呼
 と居るまは誰あやあうんと振むは看まを喜柳指の船
 宿の女房と良明所の藝者まをま 一お掛ひご子道理
 こと後の方うう美村あわひか志て来るとまの 一ソレ也

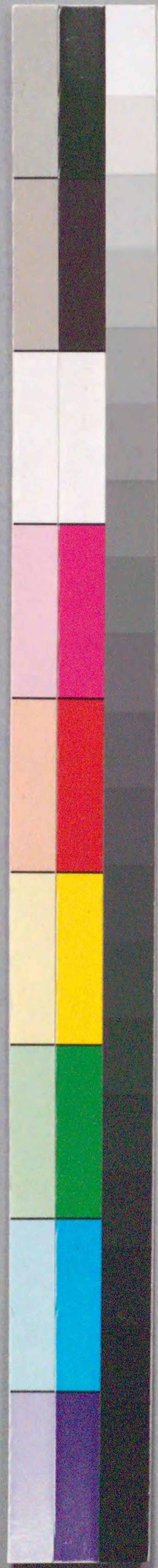
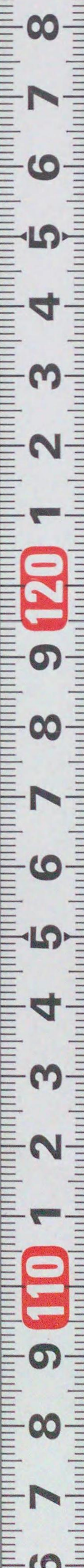
6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

らんねん 若止物 子 夫で 飛遠つこと
てお目ふ 半伝と 若止物 何物
るすつこので 鷹柳庵の 先中 人様
と美は ありの あり 限りか 結とんや
演者さん 何物 何と 様や 何と 何と
いま 罪あり ます 梅が 何と 何と
也が ありて 出ら 何と 何と 何と 何と
ふは 非る 何と 何と 何と 何と

うま 何と 何と 何と 何と 何と 何と
の 何と 何と 何と 何と 何と 何と
あさん 何と 何と 何と 何と 何と 何と
ア止物 何と 何と 何と 何と 何と 何と
とで 在 何と 何と 何と 何と 何と 何と
止物の 何と 何と 何と 何と 何と 何と
何と 何と 何と 何と 何と 何と
孝の 何と 何と 何と 何と 何と 何と

とて南階の母一人娘ひとりおまひねを慈母が長子の病を
やまひのうらつゝまゐりて一貼かんと申成ら自の中は娘の
孝行イヤモウ迷の上へまゐりて所々の中は箱を儲け人
よりの降秘上まゐりとおひます下まゐりて母の行状
を箱の被拵夜の何拵と親孝行の店かろしを志せし船
おか岐せまじしとめどろく止船をんが例の可電さうがり
て井やア何ぶんはまてある後人吐し何拵う救つてき
てよのど下私しとめどろく止船町お寢忘ぬ家おんこの
とて

とて存どごんごうく態く知うけおひてあそつて植本を
の影のなうごう何拵う融解とてまて美うとまおあそつて
おあそん遠くまゐりてまますと調度おのてある守家おん
の長屋うちで植本やそんの影より最聖親孝行の
て在ますのどけしと二日後お田舎の大屋とて金拵
とてつらん人が世情をまるとて女房おまるとて云て連ては
とておと家守をんへ申越てお先とておおおしとておん
嘘ぶら笑ぶらとての娘の縫針志とておまうすお及を成拵



6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

藤の何れの中にも見えておまけお女の官と小町や楊梅地と也
らけけ指の中あつたらうと入申すや此處のまゝとツサ
三ツ升あてその様の家い何の跡決て此處より一ト
はを後方を振えり。元彼処小章第や何うの由であ
家ぐありませう。此處の先の裏で此のまゝ。三ツ升
ちやアお家のイヤとこのし女と田舎の大それと何とや
が連て性のお遠く振へんてありや申す。左様で此處の
まゝツサと三ツ升何れもて田苗代ぐーさんの惜志の多
た三ツ升お下。酒息つて蕭然とふる疾つきを脱して又一
本々三ツ升お威んまゝとふるのつて官ちやアありませんト
云まて此の付と三ツ升。七ツ升人移人か官女を拵と云
元と落すお申す及お申す。苗代ぐーさんの賣る家地
如の強ひのたつとツサ。一ツ升女女と三ツ升拵を云
此存ト多く只親孝めと云て扱つて養ひてこの名を云
おの拘を多るおのて此處のまゝア子。一ツ升自分の好ま
根生お引つらして女を扱ふと云何と云や。此處お申すかを云

藤の何れの中にも見えておまけお女の官と小町や楊梅地と也
らけけ指の中あつたらうと入申すや此處のまゝとツサ
三ツ升あてその様の家い何の跡決て此處より一ト
はを後方を振えり。元彼処小章第や何うの由であ
家ぐありませう。此處の先の裏で此のまゝ。三ツ升
ちやアお家のイヤとこのし女と田舎の大それと何とや
が連て性のお遠く振へんてありや申す。左様で此處の
まゝツサと三ツ升何れもて田苗代ぐーさんの惜志の多
た三ツ升お下。酒息つて蕭然とふる疾つきを脱して又一
本々三ツ升お威んまゝとふるのつて官ちやアありませんト
云まて此の付と三ツ升。七ツ升人移人か官女を拵と云
元と落すお申す及お申す。苗代ぐーさんの賣る家地
如の強ひのたつとツサ。一ツ升女女と三ツ升拵を云
此存ト多く只親孝めと云て扱つて養ひてこの名を云
おの拘を多るおのて此處のまゝア子。一ツ升自分の好ま
根生お引つらして女を扱ふと云何と云や。此處お申すかを云

ガラス使用

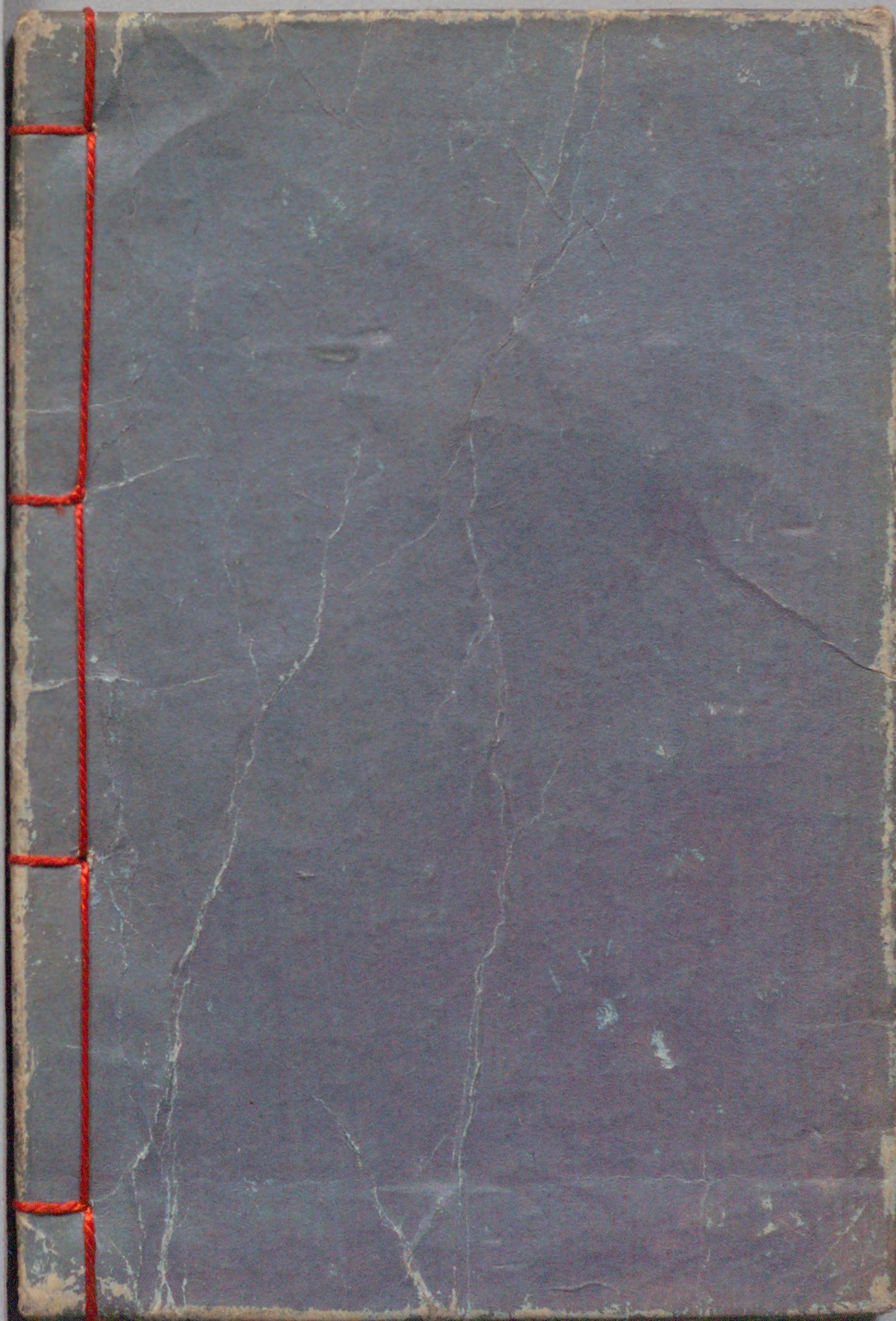
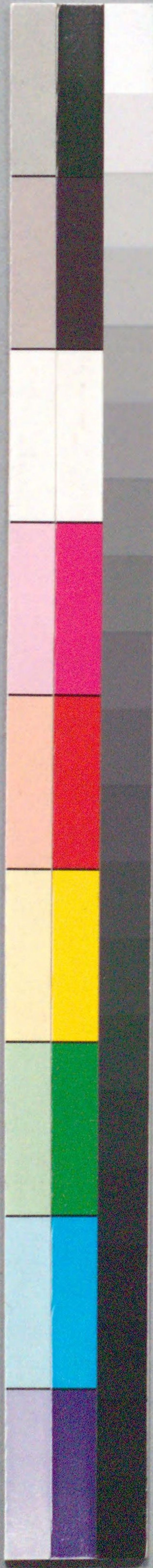
国立国会図書館 柳横櫛 5編15巻 208-751



208
15
751

栞の横櫛三編上 終

自後より一自分かつんやア彼懐の去このあうを
つて飛らう名あからせ中大薬ふらうらうアやくを
ちやアおあえん四ぞんドので四のま子トはまてハット
よらうアヤどしてレ知やアあえぬで自己かあつて
飛らう下りな後方あて彼のみ倍かせんあうあう
うらうアア着てまがぬまうあアがらうリアイ



国立国会図書館 柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用